Ⅰ　学校の概要

アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業　**高松市立牟礼小学校**

◆児童数及び教員数

〇児童数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	特別支援	全　校
２学級 ５６名	２学級 ４５名	２学級 ５６名	２学級 ５０名	２学級 ６１名	２学級 ５４名	３学級 ４名	１５学級 ３２６名

〇教員数　　２３名

◆学校の特色

本校の児童は明るく素直で、与えられた課題に対して一生懸命努力しようとする。一方で、教師が指示したことだけに取り組み、自ら考え発展させて課題を解決しようとしたり、新たに課題を設定して取り組んだりすることが苦手な児童が多かった。また、自分に自信がないために、様々な活動に意欲をもてない面も見られた。全国学力・学習状況調査や香川県学習状況調査の質問紙調査からも、自尊感情に関わる項目が国・県の平均を下回るとともに、「国語・算数の勉強が好きだ。」と回答した児童の割合も全国平均を下回っていた。

そこで、平成 27 年度からアクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業の指定を受け、主体的に課題づくりをしたり協働的に課題解決に取り組んだりすることで、生き生きと考えを発表したり、友だちの意見に耳を傾けたりしながら、ともに課題解決をする児童の姿を目指して指導の改善・工夫を図ってきている。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

自信をもって生き生きと学習する子どもの育成

―「深い学び」の実現を目指した学びのつむぎ―

◆研究主題設定の理由

本校では、２年間継続してアクティブ・ラーニングの研究を進めてきた。１年目は、協働的な学びの場づくりの研究から始まったが、２年目は、より一層、児童の思考過程を深く見取って、学びをつないでいこうとする姿が、教師に見られるようになってきた。その結果、児童の学びへ向かう姿が徐々に変わってきている。

成果は、以下の３点である。

① 考えたくなる学習課題設定の工夫や、学習マップなどで単元の見通しをもつことで、児童の学ぶ意欲が向上してきたこと

② 対話の質を高める工夫をしたり、思考ツール・ミニボード等で可視化を図り、思考の深まりを促したりすることで学びの実感がもて、思考力の向上が図られたこと

③ 振り返りで次の課題を自覚させたり、学級・学年で共有させたり、深まった課題を見出し、教科の見方・考え方を使って納得解を創り出させたりすることで、深い学びの実現へと近づきつつあること

一方、課題としては以下の２点である。

① **学校教育目標に基づく児童の資質・能力の育成を図るためには、教科の枠にとどまらないカリキュラム・マネジメントの構想が必要となっていること**

② **１時間の学習プロセスや内容の改善だけでは、本校の求めている「学びに向かう意志」や、「深い学びの実現」は難しく、学習を支える土台づくりや問いの質を高める研究が必要となっていること**

以上の成果と課題を踏まえ、本校では、「深い学び」の一層の実現のためには、児童が、思いや考えを自由に表現できる温かい学級集団をつくることが不可欠であり、その大きな土台のもとで、学びを関連付けたり、再構成したり、創造したりする活動を繰り返すことが重要だと考えた。そこで、今年度は、サブテーマを「『深い学び』の実現を目指した学びのつむぎ」とし、研究を行うことにした。

◆研究内容及び方法

（１）研究内容

① 主体的な意欲や学習を支える土台づくり

- 「マイ・スタディ」（朝読、ゆうかりタイム、補習教室）の在り方と工夫の再考
- 家庭を巻き込み子どもの意欲と基礎・基本を伸ばす家庭学習
- 自分を表現したり、人とかかわったりする体験や経験の充実
- 安心安全で豊かな対話ができる学級づくりの実践

② 「深い学び」を生み出すための工夫

- 「ゆうかりっ子学習マスター」を意識した学びの過程の積み重ね
- 教材との出合わせ方や課題の持たせ方（問いの質を高める）等の工夫による**主体的な学び**づくり
- 多様な学習形態や自分の考えをツール等で表現し伝え合う場面設定の工夫による**対話的な学び**づくり
- 各教科の「見方・考え方」を働かせながら知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりする学びの実現

③ カリキュラム・マネジメントの視点をもっての授業づくり（牟礼小マスタープラン）

- 教科の学習内容を横断し、子どもの学び力を高める実践
- 社会（地域）とかかわる「社会に開かれた教育課程」の実践

④ 毎日の授業実践での取り組み

- 個人テーマを設けて、計画的・継続的に実践を行う。
- 「発問の仕方」「板書の工夫」「学び合いの場づくり」など、重点項目を決める。

（２）研究方法

① 現教推進委員会の企画・発信により、校内授業研究を中心とした全体研修

- 各学年・少人数・専科・若年研修等、教員を縦・横に結んだ研修
- 研究授業と日常の授業をつなぐ「パワーアップ月間」で、授業改善

② ３部会プロジェクトチームによる全員参加型の研修

- 「学びの土台」「深い学び」「カリキュラム・マネジメント」の３部会からの発信と実践
- 世代や受け持ち学年を越えたワークショップ型討議
- ホワイトボードや掲示板等の利用による視覚化・共有化

③ 個人テーマを掲げ、日々の授業の中での実践研究

- 教員一人一人の主体性を生かした授業力の向上
- 具体的な実践の発信による学びの共有化

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1（児童質問紙）学習したことが他の勉強や自分の生活などに生かせていると思うことがありますか。

指標　　「①している＋②どちらかといえばしている」の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
88.6%		95%		90.4%

指標の達成に向けた実践

第１学年　国語科「はなしたいな　ききたいな」

（1）カリキュラム・マネジメントの視点をもっての授業づくり

生活科「がっこうだいすき」との合科的な取り組みとした。生活科で扱ってきた内容を国語科の表現活動（話す･聞く）に生かすことで、２つの教科の目標に迫ることができ、特に、学習への動機付けとして効果的だった。

また、内容的に、自分たちが探究している「学校の先生」であったことで、さらに主体的に学習に向かうことができ、国語科として身に付けたいこと（話したいことを決める・友だちの話を主体的に聞くこと）の獲得にも役立った。

「深い学び」を生み出すポイント

生活科と関連させたカリマネで、話したいことが見つかり、内容が深まる。

（1）学習課題を確認し、学習の見通しと計画を立てる。
（2）ミニサークル対話を開いて、どうしても紹介したいことを決める。
（3）紹介したいことを詳しくしたり、話す練習をしたりする。
（4）「先生のひみつ発表会」を開き、振り返りをする。

生活科「がっこうだいすき」（３時間）
・「先生のひみつ発表会」で分かったことをまとめよう。
・おうちの人にも、先生のひみつを知らせよう。

生活科「がっこうだいすき」（５時間）
・先生のひみつを調べよう
・いろいろなひみつが見つかったよ
・みんなにしらせたいな。

（2）「主体的・対話的で深い学び」に向かうための工夫

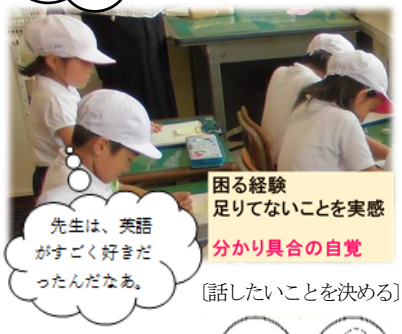
①少人数によるミニサークル対話の繰り返し

「話す・聞く力」特に、「問い返す力」の育成が、対話力を育て、深い学びへの一歩となると考え、朝の活動で「サークル対話」を続けた。本単元では、聞きたい先生のところへ集まっての「ミニサークル対話」を通してどうしても紹介したいことを決めていった。あらかじめ生活科の学習で聞きたいことを見つけておき、それをもとに対話で広げる活動であったが、日頃の活動を生かし、友だちの質問から話を広げることもできた。

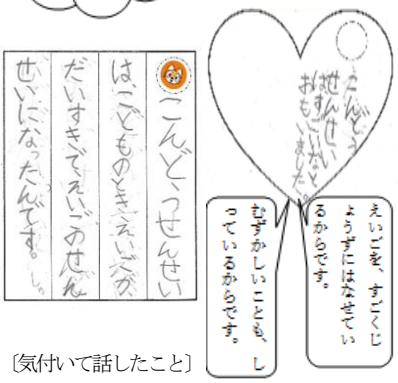
〔ミニサークル対話の様子〕

②「ゆらぎ」を生かして、深い学び

先生や友だちとの対話を終えて、どうしても話したいことを決める段階で、「ゆらぎ」が起きた児童が出てきた。それは、話したいことがないのではなく、自分がした質問より、質の高い内容に気付いたからである。児童は、先生ウォッチングやインタビューを繰り返しながら、どうしても話したいことを決定した。そして、集めた情報を、みんなに話せるように考え直した。単元の最後に行った「先生のひみつはっぴょうかい」では、「先生は、すごいと思う！」と、相手への思いやその具体例を加えて話すなど、気付きを深めることができていた。



〔話したいことを決める〕



〔気付いて話したこと〕

カリキュラム・マネジメントの視点からの授業づくりで、学習内容への動機付けができ、児童が主体的に学習を進めることができた。また、対話を繰り返し行うことで、児童の内面で「ゆらぎ」が起こり、自らの認識を深め、考える場が生まれた。自分が探究し、思考した内容について、さらに表現する活動を行うことで、深い学びを生み出すことができた。

◆指標設定と達成に向けた取組

２（教員質問紙）児童生徒の多様な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や助言等をしていますか。

指標　「①しているのみ」

５月調査	→	目標値	→	11月調査
13.6%		70%		63.6%

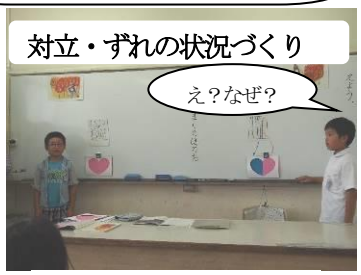
解釈にずれのある意見を取り上げ、再考する必要感をつくります。

指標の達成に向けた実践

第３学年国語科「中心人物の気持ちの変化を考えながら読み、感想を交流しよう～サーカスのライオン」

（１）対話の必要感を感じる学習課題を生み出す発問

場面ごとに読み取りをした後、解釈の違いを際立たせるために「炎になったじんざをどう考えるか」という発問をした。ここで、解釈にずれのある二人を取り上げ、その理由を話し合った。その時、言葉だけでは解釈の違いがとらえにくい児童がいるので、じんざの気持ちをハートメーターで表し、視覚的に表すことで、互いの考えの違いに気付きやすくした。「え？」「なんで自分と違うの？」という疑問やとまどい（ゆらぎ）から、児童は対話の必要性を感じていた。



〔解釈の違う二人〕

（２）じんざの気持ちが変化した理由に焦点化して対話させる

もう一度「炎になったじんさ」について考えた。この時、じんざ役の友だちに「どうして」「なぜ」など質問し合う場をつくることで、１つの出来事への多様な見方ができるようになっていった。また、友だちの考えを聞いて、ハートメーターは同じ色でも理由が違うことにも気付き、さらに自分の考えを確認したり、見直したりしようとした。

〔じんざ役と自分とで対話〕

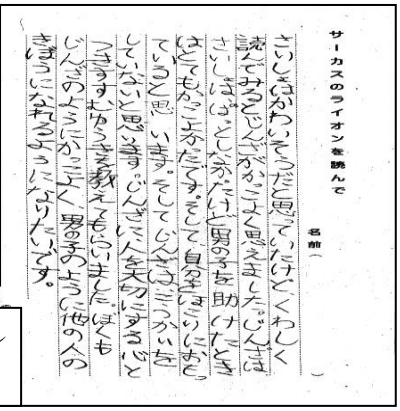
（３）複数の場面と場面を関係付けて考える場を設定しておく

再度、場面を振り返り、友だちと話し合ったことをもとに自分の考えをより確実にしたり、新たな考えを生み出したりする。物語の場面と場面の関係付けて考えることができるよう全文を掲示しておく。根拠となる言葉をつないで話し合っていた。

〔場面と場面を関係付けて〕

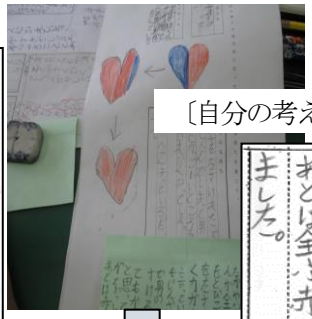
（４）深い学びを生み出すよう再構成の場を設定する

対話を通して考えたこと気付いたこと、物語を俯瞰的に読んで気付いたことを自分の中でもう一度整理して考える時間をもつことが大事である。根拠を持ったうえで、自分の考えが変わっていった。


サーカスのライオンを読んで

さいしょはわるいそうだと思っていたけどくわしく読んでみるとじんざがかっこよく思えました。じんざはさいしょはずっとしんだいと男の子を助けたときなどもかっこよかったです。そして自分をまきこまないようにおとっていると思います。そしてじんざはこどもがいたずらしていたのを思います。じんざにんを気にするのとつきうすかからさえ教えてもらいました。ぼくもじんざのようにかっこよく男のようにしゅの人のきょうになれるようになりたいです。

単元を通した感想



〔自分の考えの変化を視覚的に表す〕

まずさいしょは、ハートが赤まきもけんかずつでそれからえんかやぬきせいとんがまえかで火の中をとびこえ男の子をたすけてはく力がまると言っていてぼくもじんざがぜんかで男の子をたすけるのがとてもかっこいいと思ってハートがちょっと青でおとなは全ぶ赤になりました。

〔自分の考えの変容を振り返る〕

解釈に違いが出る場面で対話することで、児童は、友だちから多様な考えを聞いて再構成し、自分の考えの変化を自覚して学ぶ価値を実感していった。その際、考えを可視化したり、振り返る視点を共有したり、自分の変容の根拠を探って深まりを感じることができるよう振り返る時間を確保したりすることで、深い学びを生み出すことができた。児童の振り返りを生かすことができるような見取りや支援の工夫が必要である。

◆指標設定と達成に向けた取組

３（児童質問紙）学習の最後にまとめや振り返りが自分の言葉で書けていますか。

指標　　「①している＋②どちらかといえばしている」の合計

５月調査	→	目標値	→	11月調査
77.8%		90%		90.1%

指標の達成に向けた実践

第６学年　社会科「戦後の日本の歩み」

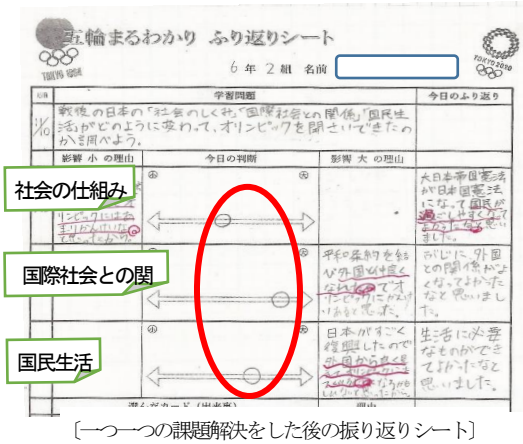
（1）「単元を貫く問い」と「それに迫る問い」を設定する場づくり

「戦後」と「オリンピックを開催しようとする頃」の日本の様子の写真を見比べ、「どうして戦後１９年で、東京オリンピックができるようになったのだろう。」という単元を貫く問いを設定した。そして、その問いを解決するために「社会の仕組み、国際社会の復帰、国民生活の向上が起こったのではないか？」という予測から学習課題を設定し、単元の見通しを持たせた。

単元を貫く問い

（2）単元を通して「単元を貫く問い」に立ち返られる振り返りシートの活用

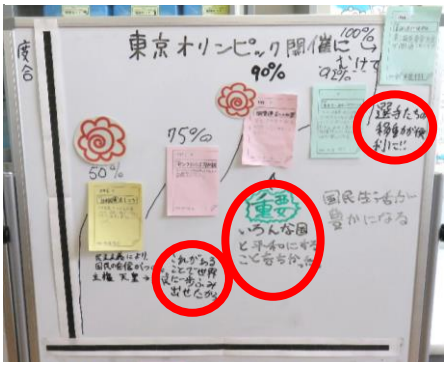
学習した事象が東京オリンピックの開催への影響が「大きい」か「小さい」かを判断し、その理由を考え、表現できる振り返りシートを作成した。影響度では視覚的に分かりやすく、また、事象同士を比較しやすいようメーターを用いた。影響度が「大きい」か「小さい」かを考え、判断することでその理由や根拠を自分の言葉で述べる必要が出てき、振り返りを通して学んだことの再構成を図ることが出来た。また、児童は学びがつながり、広がっていることに充実感を得ていた。



〔一つ一つの課題解決をした後の振り返りシート〕

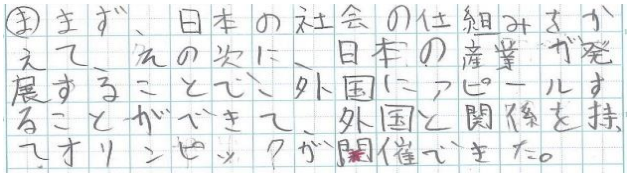
（3）自分なりの考えを表現する場の保証と教師による価値付け

オリンピックへの影響度という視点で交流を行い、それぞれの出来事を比較したり関連付けたりして「単元を貫く問い」に対する答えをグループで考えていった。A児のまとめを見ると、３つの観点が関わり合い、①「社会の仕組み」②「国民生活」③「国際社会との関係」の順序でそれぞれ解決したことで、オリンピックの開催に繋がったことに気付いていた。また、B児はそれまでの国民の不断の努力による結果であるとも考えていた。このように論理立てて学んできたことを再構成し、表現するまとめを価値付けることで、単元を通して学ぶことと振り返りとが結びつき、単元を通して学ぶことの意義を見出すことができると考える。

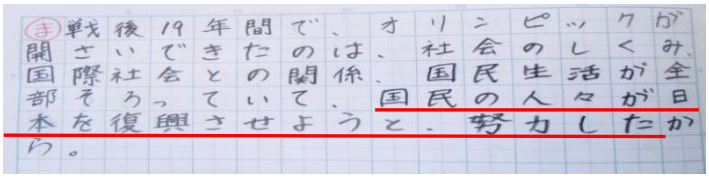


〔互いの考えを表現し合い、再構成に役立ったボード〕

A児の振り返り


まず、日本の社会の仕組みをかえて、その次に、日本の産業が発展することで、外国にアピールすることができて、外国と関係を持てオリンピックが開催できた。

B児の振り返り


戦後19年で会社の仕組みが全日本国際社会の関係、国民の生活が全部そろってきたのいらい、国民の人々が復興させようと努力したから。

「単元を貫く問い」と「それに迫る問い」を設定し、一つ一つの課題解決を繰り返しながら、最終の「単元を貫く問い」に到達した。児童が主体的に行った、振り返りシートを参考にしながら学びを再構成し、「単元を貫く問い」に迫るという試みは、学びの質を高めることに役立った。

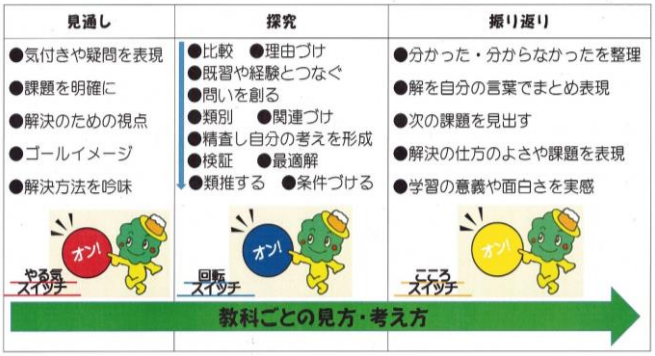
◆特徴的な取組

研究主題実現へ向けた学びのつむぎ

本校の研究主題**「自信をもって生き生きと学習する子どもの育成ー「深い学び」の実現を目指した学びのつむぎー」**を具現化するために、研究授業を基に討議を行い、そこで生まれてきた仮説を次の研究授業で検証していくという方法で積み上げてきた。「深い学び」や「深く学ぶ児童の姿」についての討議で出てきた意見は、その都度画用紙やホワイトボードにまとめ、その後、いつでも見ながらトークをしたり、振り返ったりできるように掲示しておいた。

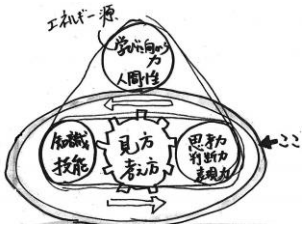
牟礼小学校の教員全員で共有した「深い学び」とは、『各教科等の特質に応じた「見方･考え方」を働かせ、これまでの学びを再構成し、思考を表現すること』である。そして、「深い学び」に向かう具体的な児童の姿を洗い出し、それをキーワードとして表（左）にし、実践に生かすことにした。

「深い学び」に向かう子どもの姿　キーワード（牟礼小スタイル）



（1）「深い学び」とは

１学期、４年算数「垂直と平行と四角形」２年生活科「大すき！ぼくのわたしのむれの町」の２本の研究実践から、児童が深く考えている時は、習得してきた知識や技能をベースに、見方・考え方を働かせて、思考・判断・表現しているのではないかという仮説が生まれた。そこで、児童自らが深い学びに向かう仕組みを右図のように考えた。この歯車を回すのは、もちろん児童自身である。「〇〇したい！」と願う主体的なエネルギーが蓄積された時に、回転が始まり、深い学びへと向かうことができるのではないか。そのためには、エネルギー源となる何かが必要となってくる。



〔深い学びのイメージ図〕

（2）「ゆらぎ」と「再構成」により「深い学び」は生まれる

２学期、１年国語「はなしたいなききたいな」の研究実践から、児童の反応の中に考えが揺らいだものがあり、それは、児童自身が、より高まったものを生み出そうとしているのではないかと考えられた。

さらに、３年国語「中心人物の気持ちの変化を考えながら読み、感想を交流しよう～サーカスのライオン」では、自分の考えに「ゆらぎ」が起きることで、友だちの考えを聞きたい必要感が生まれ、さらにより深い考えに到達できるのではと考え、そうした状況を生み出す「問い」とは何なのかについて検討した。

その後の研究討議の中で、より深まった認識を生む状態を「再構成」と共通理解し、「ゆらぎ」と「再構成」をキーワードにした研究が展開されていくことになった。「再構成」は、児童自らの「ゆらぎ」によって生まれるのであれば、教師の「問い」が重要である。また、単元を見通した学習計画の中にあらかじめ「再構成」を見据えておくことで、児童はより主体的・対話的に学ぶのではないかという仮説も生まれてきた。

（3）「再構成」を見据えた「学びのプロセス」を大事にして「深い学び」を生み出す

そこで、５年総合的な学習の時間「広げよう・深めようＢｉｇな絆」、６年社会科「新しい日本、平和な日本へ」、６年理科「水溶液の性質とはたらき～何が溶けているのかな～」の研究実践では、単元構成の工夫・見通しやゴールイメージを持った課題設定のあり方、単元を貫く問い（MQ）とそれに迫る問い（SQ）を中心に研究討議を行った。児童が学習課題をしっかり意識することで、単元を通して意欲的に追究する姿が見え、友だちと対話しながら考えを比較・関連づけ・精査し、振り返ることで、また新たな課題を見い出していた。

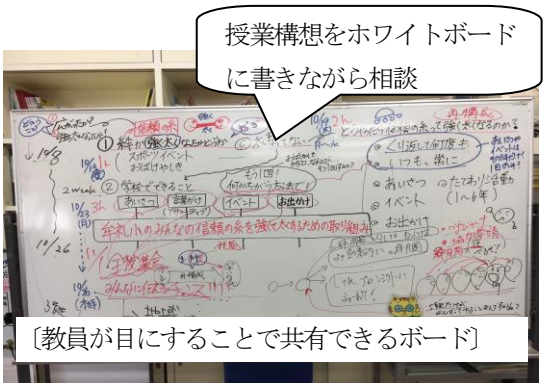
仮説をもとにした授業やその後の討議から生まれた新たな課題をつなぐことで、研究主題「自信をもって生き生きと学習する子どもの育成ー「深い学び」の実現を目指した学びのつむぎー」解決の糸口が明らかになった。それは、我々の「学びのつむぎ」の姿だったと言える。

研究内容の共有化と意欲化を図る教員研修

本校の研究の強みは教員全員での深い研修が行われていることである。それは、校内研究授業での検討会等、現職教育の時間はもちろんのこと、日々の授業に向けての方向性の共有にあると考える。

（1）話し合ったことを視覚化することで共有化

本校の研究主題を具現化する話し合いで出された意見は、その都度ホワイトボードにまとめ、いつでも見ながらトークできるようにしておいた。分かってきた事実や疑問を次の研究授業における課題としてバトンをつないでいく。さらに、話し合いの中から出てきたキーワードを表にまとめ、どの教員も表にあるキーワードに照らし合わせながら授業実践を試みることができるようにした。



〔教員が目にすることで共有できるボード〕

（2）教員一人一人のパワーアップを図る取り組み

① パワーアップ月間に自主公開授業

10・11 月をパワーアップ月間とし、全員が「深い学び」を意識した授業を行った。授業の主張点をはっきりさせるために指導計画案を示し、授業公開を行った。他の教員は、「1時間全部は無理だけど前半だけ！」というように、時間を生み出して参観し合った。授業後には、管理職や現教部からの授業分析メモや放課後の自由トーク等で、具体的な支援のあり方や思考ツール・教師の技などについて、多くの教員と共有することができた。

〔2 年算数「かけられる数とかける数」〕
自分の考え方を赤白帽で示している児童

② 自発的に取り組む若年研修

個人テーマを設け、実践を重ねながらテーマに迫ろうと、日々努力している。本年度、若年教員の多くが高学年担任であることから、放課後に研修時間をとるのが大変難しい状況となっていた。しかし、７本の研究授業前には、必ず模擬授業を行い、主張点の共有や児童の反応の予想、板書計画等についての研修を行うことができた。事前の研修は、意欲的な授業参観にもつながり、授業後の討議会では、本時だけでなく事前の研修とつないだ意見も多く出された。

互いに意見を出し合って構想を練る若年教員

（3）協働の精神で作る「チーム牟礼小」

「チーム牟礼小」は、一日にしてならず。毎日、学校中のいろんな場所で行われている教員同士の会話や助け合いの中から生まれている。強いて研究のことをあげれば、授業に関するトーク（ミニミニ模擬授業）、ホワイトボードやミニボードに書かれたメモ、空き時間の授業参観などである。目の前にいる子どもたちを、どう変えていくのか！そのためにどうするのか！を話し合い、気付いたことを伝え合い、実際にやってみてまた話し合う。そのような日々から様々な牟礼小スタイルも生まれてきたといえる。

全教員の思いを共有化する場や方法の工夫により、研究主題をより具現化することができた。さらに、日々の実践や気付きを形にする場を設け、全教員に発信することで、次への一歩を生み出すことができた。すべての根底には、認め合い、助け合う教員集団があったからこそできたといえる。

Ⅳ　研究の成果と課題

1　成果について

本校は、アクティブ・ラーニングの研究を３年間継続して進めてきた。昨年までは、１時間の学習過程の中で、①教師と児童がめあてを共有すること　②対話を通して課題解決を図ること　③まとめや振り返りから新たな問いが生まれること　を常に確認しあい、牟礼小の「学び」のスタイルとしてきた。さらに、児童が自ら新たな問いを見つけ、一人一人が深く学ぶ姿を具体的に考え、「深い学び」を生み出す牟礼小スタイルを新たに生み出そうとして研究を行った。

「深い学び」を実現する　教師のためのキーワード（実践より抜粋）

課題設定	発問	カリキュラム・マネジメント
■単元におけるMQ※（メインクエスチョン）とＳＱ※（サブクエスチョン）の設定 ■自分のこだわりを表出する課題（例：「どうしても～」） ■簡単すぎない少し高いハードル ■子どもの経験・必要感を生かす　等	■根拠を促す「なぜ～？」発問 ■対立、ずれが表出する発問 ①意思決定 （例：「自分は～」） ②価値判断（例：Ｏor×） ③批評（例：点数化） ■論説や推論を促す 「もしＯＯならば？」発問　等	■学びの必要感を生み出す合科的単元づくり （例：生活⇔国語） ■活用の場を生み出す教科等横断的単元づくり ■単元通して繰り返し挑戦する機会の確保 ■振り返りの視点の共有化　等

※MQ…単元を貫く問い　　ＳＱ…MQに迫る本時（1時間）の問い

（1）　「深い学び」に向かう子どもの姿を生み出すための支援

①カリキュラム・マネジメントの視点を生かして主体性を生む

- 単元全体を見通し、教科間の関連付けや合科を行うことで、児童の意欲や主体性を引き出すことができた。
- 特に生活科や総合的な学習の時間と各教科との合科では、学習内容への動機付けができ、児童が主体的に学習を進めることができた。
- 教科を横断して合科的に扱うことで、各教科の目標を達成する上でも十分成果が認められた。

②「ゆらぎ」を見取り、対話の場の設定を行う

- 対話を繰り返し行うことで、児童の内面で「ゆらぎ」が起こることがある。「ゆらぎ」は、深い学びへと向かうスイッチとなり、自らの認識についての理解が深まり、考える場が生まれた。
- さらに、解釈に違いができる場面で対話することで、児童は、友だちから多様な考えを聞いて再構成し、自分の考えの変化（深まり）を自覚して学ぶ価値を実感することができた。

③主体的な振り返りを生かして、思考を再構成する

- 「単元を貫く問い」と「それに迫る問い」を設定することで、単元全体を見通したり、主体的に取り組んだりする児童の姿を見ることができた。
- さらに、単元を通した振り返りシートを活用することで、１時間ごとの学び（自分なりの単元課題に迫る深まり）を児童の言葉で積み上げていくことができた。
- 自分の考えを可視化したり、振り返る視点を共有したり、自分の変容の根拠を探って深まりを感じることができるよう一人で振り返る時間を確保することで、深い学びを生み出すことができた。

④児童の「深い学び」を生み出すための、牟礼小スタイルの確立

「牟礼小アクティブ教師　深い学びのための３つの心得」

一つ、単元見通し、ゴールイメージもつべし。
一つ、子どもを見取り、「ゆらぎ」生かすべし。
一つ、再構成、促す板書と発問　何より教師も深～く学ぶべし。

深い学びの実現を目指した「学びのつむぎ」のためには、教師の深い教材研究と教師集団の熱い思いが大切ですね！

2　今後の課題

- 学習のまとめや振り返りと関連付けた家庭学習に取り組ませ、さらには、それを次時の学習に生かす工夫を試みる。
- 深い学びのための「牟礼小スタイル」の日常化を図り、常に児童が主体的・対話的な学びに向かう教師の工夫を全教員が共有する。
- カリキュラム・マネジメントの視点に立った教科や単元の見直しが必要である。特に、社会（地域）とかかわる「社会に開かれた教育課程」の構想と実践を急ぐ必要がある。